

2章 防災教育の必要性と課題

2.1 災害伝承～多くの犠牲者～

現代科学の急速な進歩は自然災害のメカニズムを解明した。台風の進路予想が高い精度で可能となり、地震の発生メカニズムも解明された。また、緊急地震速報により、強い揺れが来る直前に命を守る行動を取ることができるようになった。それでも自然のエネルギーは強大で犠牲者が後を絶たない。

自然災害に関して何の知識もなかった科学文明が発達する以前の人たちは、どのようにして自然災害に備えたのであろうか。日本はアジアモンスーン地帯にあり、台風の通り道もある。また、プレートの沈み込み帯にあり地震活動が活発である。日本人は古来より豪雨災害に、台風災害に、そして地震災害などの多くの自然災害に悩まされてきた。

地震災害に関わることわざで最も有名なもの一つは、ナマズが地震を起こすという俗信であろうか。江戸時代には地震の発生原因に関する知識はなかった。突然に発生する地震を大ナマズのせいにするのも何か奥ゆかしい。今日でも地震発生前に動物が騒ぐという話が流れことがある。江戸時代の大地震の発生前にナマズが暴れ、それを見た人たちの話が風評として伝わっていったのであろうか。科学の進んだ今日でも、地震発生に関してはSNSで様々な風評が流れる。それとあまり変わらないよう思う。

水害に関しては、柳田国男が遠野物語で紹介した河童伝説が有名である。子供の時に、誰でも一度や二度、河童伝説を聞かされている。川には河童が住んでいて足を引きずり込まれるから怖いと思っている。このような話は全国にある。多くの子供が水害に遭っているので、子供たちを水害から守るために怖い河童伝説が流されている。

上に示したような自然災害に関わることわざや話は多くある。それとともに災害伝承記念碑が全国各地に建てられている。

大正3年（1914年）1月12日の桜島大噴火では死者・行方不明者58人の犠牲者が出了。この火山災害に関しては多くの記念碑が残されているが、その中の一つが「科学不信の碑」として有名である。碑の一節に「住民ハ理論ニ信頼セズ異變ヲ認知スル時ハ未然ニ避難ノ用意尤モ肝要トシ」とある。要は、異変を感じた時には、いち早く自分の判断で避難しなさいということが書かれている。これは当時の村長が鹿児島測候所（現鹿児島気象台）の桜島火山の噴火の危険性を問い合わせたところ、測候所は差し迫った爆発の危険性はないと回答した。それを信じて住民に避難を促さなかった結果、多くの犠牲者が出了。それを悔いての村長による記念碑建立である。科学不信とは何とも思い切った記念碑である。しかし、東日本大震災でも、想定外の規模の津波が襲ってきた。その結果、多くの犠牲者が出了ことは否めない。科学技術が進歩した今日でも、早期避難に勝る科学はない。

まとめ

- ・近年、自然災害のメカニズムが解明され、予報技術が大いに進展してきた。僅か100年前の桜島大噴火災害の際には、「科学不信の碑」が建てられている。科学の進んだ今日、自然災害のメカニズムの多くは解明されてきた。また台風の進路予測の精度はかなり向上してきた。しかし、地震発生の予測はほぼ不可能である。また、大規模豪雨災害をもたらす線状降水帯の発生予測の精度もまだまだである。科学の大いなる進歩が期待される。
- ・科学技術が進歩した今日でも早期避難に勝る術はない。「科学不信の碑」は、桜島噴火が差し迫っていないとの鹿児島測候所の見解を信じたことにより多数の犠牲者が出了ることにある。自分の命は一つである。失えば、取り返すことはできない。また、死に対して科学者の誰も責任を取れない。自分の命を守る術、それは、津波災害と豪雨災害、土砂災害に関してはいち早い避難である。また、いつ起きるか分からない地震に対しては、耐震補強などの万全の備えをすることである。
- ・全国各地に津波災害伝承の碑が建てられている。また、大規模な土石流災害や洪水災害の碑も多い。それとともに渴水災害や洪水災害による飢饉の碑も多い。ひとたび飢饉が発生すれば、何万人という単位で犠牲者が出ることもある。食べ物に恵まれている今日では、飢饉で餓死するということは想像もできない。しかし、産業革命により生産性が大幅に増加するまでは、餓死と背中合わせの生活をしていたのである。



松山市南高井町の長善寺前に建つ災害伝承碑
～當郷餓死萬靈塔～

享保17年（1732年）大飢饉による死者を弔うための伝承碑。享保17年、春から長雨が続き、5月には河川のはん濫と麦の腐敗で収穫はゼロとなる。6月、7月と続く降雨で、病虫害が発生した。特にウンカの異常発生により稻は殆ど枯死した。この年の松山領内の餓死者は5,705人に及んだ。高井村の半数が餓死した。義農作兵衛が麦種俵を枕にして餓死したのはこの年の9月である。この碑は建立後、洪水で流されて破損した。発見後に修復して建て直されたものである。

2.2 防災教育の発端は

防災教育の目的は、命を守ることである。そのために自然災害の発生メカニズムを知り、地域の災害のリスクを知り、地域の備えを知り、災害発生時の対応について考え、それらのことに関する実践訓練を通して、災害発生時に対応できるようにすることである。

日本において本格的に防災教育に取り組み始めたのは、30年前の阪神・淡路大震災以降である。阪神・淡路大震災では、建物倒壊により多くの人が下敷きになった。その人たちの救助に際し、警察官や消防職員以上に活躍したのは、大半が家族や近所の方々であった。この大震災を契機として、「自助」、「共助」が叫ばれだした。大災害の時には、公助には限りがある。まず、自分の身は自分で守るという当然のこととともに、隣近所の助け合いとしての「共助」の重要性が指摘された。

日本は自然災害多発国であるので、防災の知識はそれなりに豊かである。例えば、小学校の教科書で取り上げられている「稻むらの火」では、大規模地震発生時の津波の怖さを紹介している。大地震があれば大津波の可能性があるということは、日本国民の多くは知っている。しかし、平成16年12月26日に発生したインドネシア・スマトラ沖地震では、津波に関する知識が不足していたために多くの人が命を失った。

ただ東日本大震災の際には、防潮堤が整備されているから大丈夫であるとか、ハザードマップで津波浸水域に入っていないから大丈夫であるといった過信により犠牲になった人もいる。東日本大震災は想定外の規模であった。そのため、既存の防潮堤もハザードマップも命を守る切り札にはならなかった。「津波てんでんこ」に代表される、何よりもまず、自分の命は自分で守るという防災教育の原点に絶えず立ち返ることが必要である。

防災教育は、この30年間に大きく進展してきている。地域や学校、企業などでも様々な取組がなされている。また、行政はハザードマップを積極的に公開してきている。しかし、自然災害の脅威は、凄まじい勢いで増してきている。自発的、かつ継続的な防災教育への取組が求められていることを強く認識したい。

まとめ

- ・自然災害国家日本では、「津波てんでんこ」に代表されるように自然災害の教訓が語り継がれてきた。しかし、阪神・淡路大震災では想定を超える都市型災害が発生し、多くの方が犠牲になった。
- ・阪神・淡路大震災以降、防災教育への熱心な取組が行われだしてきている。大規模な災害に対しては、消防や警察などの公的な救助が間に合わない。家族や隣近所が助け合って命を守ることが求められる。

「稻むらの火」

和歌山県有田郡広川町の濱口悟陵が、安政元年（1854年）の安政南海地震による津波が発生した際に、村民の避難路を照らすために貴重な稻むらを燃やして住民を救ったという物語である。津波に対して早期避難の重要性と人命救助のための犠牲的精神を讃えている。濱口悟陵は、この後、堤防造成に取り組み、来る津波への備えをしている。この堤防は、昭和南海地震の際の津波を立派に防いでいる。

広川町には、「稻むらの火の館」が設置されており、多くの人が訪れている。



津波で家族や家、仕事を失った村人に生きる希望をもたらすために濱口悟陵は私財を投げうって堤防建設に取り組んだ。村人は堤防建設の現場で働き、収入を得て命をつないだ。4年かけて堤防は完成了。昭和21年12月21日に昭和南海地震が発生し、4mの津波が襲ってきたが、堤防に守られた地域は無事だった。自然災害に苦しめられてきた日本では、各地にこのような話が残っている。自然災害にみんなが力を合わせて立ち向かってきている。

「津波てんでんこ」

ここで、東日本大震災の際に、釜石の奇跡として有名になった「津波てんでんこ」について考えてみる。大規模な津波に何度もなく苦しめられてきた三陸では、いち早い避難が叫ばれている。

津波災害から助かるには早期避難しかない。その意味で「津波てんでんこ」は正しい。しかし、もし家族の1人でも亡くなると、その悲しみは一生を通してつきまとう。津波発生時にいち早い避難は正解である。ただ津波が発生する前に家族でいち早い避難と避難先の確認、1人では避難できない家族に対する対応の仕方などについてしっかりと議論しておく必要がある。親であれば、子供を残して一人でいち早い避難をすることは絶対にできない。「津波てんでんこ」で子供を残して自分が助かったとしても、その自責の念は一生ついて回る。

「津波てんでんこ」は当たり前の行動であるが、それ以上に、事前に津波避難先などの必要事項について家族で十分に話し合っておくことが大切である。

2.3 防災教育の課題について考える

阪神・淡路大震災以降、防災教育は全国各地の学校や町内会、また職場などでも熱心に取り組まれてきている。防災教育花盛りといった感があるが、課題も多々残されている。

防災教育の課題を挙げると、まずは継続性や自立性が最も大きな課題であろう。継続的に、かつ、自立的に防災教育を実施するためには、仕組み作りが必要である。もちろん経費をかけねば、それなりに成果の出る活動はできる。

しかし、ここでは経費をかけないで成果の出る防災教育について考えてみたい。もちろん人間はお金で動く。現在社会の発展は経済活動のなせる業である。物質的に豊かになりたいという人間の持つ私的欲望が経済活動を支えている。

しかし、人間の欲望は経済的な、物質的なものだけであろうか。そうではない。人間は本性的に他者や自然界を大切にする精神を有している。この精神が家族を大切に、友人を大切に、地域の人を大切に、時には通りすがりの人さえ大切にする。また、開発の荒波の中で荒れた自然を少しでも元に戻したいと取り組む多くの人が世界津々浦々にいる。人間は本来的に他者を大切にし、自然をめでる精神を持っている。

この精神を呼び覚ませば、この精神を活動の中心に据えさえすれば、活動は永遠に続く。人間が数十万年の歴史の中で、家族を大切にし、子どもを育んできたことが何よりの証である。人間が数十万年の期間にわたって存続してこられたのは、家族愛を中心とする精神の賜物である。

這樣に考えると継続的で、自立的な防災教育の中心は、他者を思いやる心でなければならない。ところで、日本人は長きに渡って公徳心教育を受けてきている。仏教、儒教、武士道、尊王の精神などに裏打ちされた家族や地域を大切にする心を、戦後の民主主義教育が始まるまでは間違ひなく受け続けてきている。戦前の教育を受けてきた人たちには、その精神が流れている。しかし、その尊い精神も風前の灯火である。終戦から80年が経過した。戦前の教育を受け、公徳心に溢れる人たちが、一人一人と消えていている。私たちは、日本人が長く受け継いできた貴い精神を今こそ復興させなければならない。

この精神復興のためには、防災教育がうってつけである。それは自分の命が危険にさらされる極限の状況下で、自分の命を守るだけでなく、家族の命や友達、そして地域の人たちの命も守らなければならないからである。防災教育の目的は守らなければならぬという精神を持った人を養成するのではなく、守りたいという精神を持つ人の養成でありたい。

防災教育を軌道に乗せ、永続させるためには、一にも二にも、公徳心溢れる指導者の育成を目指せばよい。それでは、いつから育成するのか。子どもの時からか、社会人になってからか。定年退職して時間的な余裕ができるからか。教育に目覚めるのに時はない。いつでも良い。子どもの時でも、老いてからでも。早すぎることもないし、遅すぎるということもない。決意した時がスタートである。ただ理想的には子どもの時か

らが望ましい。精神も肉体も子どもの時に大きく成長する。教育は若ければ若いほどいい。

松山市で取り組んでいる防災教育は、子どもの時から始め、一生を通して学ぶものである。松山での防災教育は、公徳心溢れる「人材育成」を目的としている。この教育は、人間が一生を生きていく中で最も大切な精神、即ち「自分を大切にし、家族と地域と自然を愛する心の養成」を目指すものである。

ジュニア防災リーダークラブでの活動を通して、防災意識とスキルを磨き、大学生になって防災リーダークラブで指導的役割を身に付け、卒業後は防災士として、学校現場で、行政の立場で、会社員の立場で、或いは地域の自主防災組織のリーダーの立場で防災に関わっていく。このようにして防災教育が継続的に発展的に実施される。

まとめ

- ・防災教育の課題は、継続性と自立性と発展性にある。災害は忘れた頃にやって来るという寺田寅彦博士の名言がある。これと同様に防災教育も災害後、暫くは熱心に取り組まれるが、徐々に手抜きされてくる。
- ・継続性と自立性と発展性を担保する根幹は公徳心の育成にある。これらを担保するためには、精神面と仕組みの面で工夫が必要である。



防災教育支援事例発表会 2008 in 新居浜

～過去から未来へ 学校・家庭・地域で育もう！防災の心～

新居浜市は、平成16年に何度も台風災害に見舞われた。この災害を受けて学校や地域では、熱心に防災教育に取り組んだ。写真に示す学校防災教育の事例報告会には、数百人の児童生徒が参加して盛会裏に開催された。それから17年が経過した。平成16年以降、大きな災害がないこともあり、防災教育は少しづつ縮小してきている。確率論的に言えば、何十年に一度という時間間隔でしか発生しない大災害に備える防災教育に対して、熱心に、継続的に取り組んでいくことは、かなり難しい。継続性と自立性、それに発展性がある防災教育のモデルの確立が求められる。